

甦る陳雲とその意義

去る六月十三日は陳雲（元中国共産党中央紀律委員会第一書記）の生誕百周年であった。六月八日には出身地（現上海市青浦区）に江沢民前党総書記の題字による銅像が建てられ、十三日の百周年記念大会では胡錦濤党総書記自らが重要講話を行っている。また党中央宣伝部などが主催するセミナー（「陳雲の一生と思想」）が三日間にわたって開催されるなど、挙国態勢での記念行事が続いた。紙面を埋め尽さんばかりの称賛の記事や論文の数々、正に「陳雲甦る」であった。

陳雲が逝去したのは九五年四月であった。一〇年後のこの仰々しいまでの生誕百周年の行事を「甦った陳雲」がどう眺めたかはさておき、政権を担う共産党にはいくつかの意図があったようである。



アジアの窓

第一は党内紀律の再建・強化である。陳雲は一九七八年十二月の第十一期三中全会において中央紀律委第一書記になり九年間トップの座にあった。その間、文革中に歪められた「党風」を見直すことで多くの冤罪者を救済したばかりでなく、党紀律の規範化に卓越し

た指導力を発揮したといわれる。この陳雲の実績を高く評価することが、現在進行中の党組織の再建に有利に作用するといっわけである。

中国共産党は昨年十二月に党紀律建設史の重要な里程碑と称せられる「紀律処分条例」を公布したが、それ以降矢継ぎ早に党紀律の引締に関する政策を打ち出している。その一方で大型連休となる五月のメーデー、一〇月の国慶節や春節（旧正月）の期間には相変らず党幹部による非合法な「外逃」が頻発していると伝えられる。党紀律の強化策は、裏を返せばそれだけ不正が多いということの証左であろう。

第二は陳雲の経済思想の根底にある均衡論に依拠して過剰投資（特に地方）の現状に警告を發することである。一九八三〜八五年、九二〜九四年の二桁成長期において陳雲はしばしば均衡ある発展を主張している。中央財政のシェア拡大とそれによるマクロ・コントロールの有効活用は依然として現代的意気を持つようである。

第三は天安門事件（八九年六月）に対する評価の固定化である。それは同時に、趙紫陽（元総書記）への「平反」（再評価）が遠退いたことを意味する。一九七七年三月の中央工作会議で鄧小平の党中央指導部への復帰を提起した陳雲は、天安門事件でも中央顧問委員会主任として鄧小平を核心とする党の方針を強く支持していたといわれる（『人民日報』九五年五月二三日など）。陳雲への高い評価が、天安門事件を「動乱」とした党の認識を固定化するとみるのは穿ち過ぎであろうか。

（小林照直・アジア研究所長）

況にある。

・対日本との関係では、パラス皇太子夫妻来日（七月五日〜十四日）、天皇・皇后両陛下、皇太子殿下等と面談を始め、二〇〇六年は両国の国交樹立及びマナスル峰初登頂の五〇周年であり、関連事業を多彩に実施予定され、両国の官民協力が活発に展開へ。

（つじいせい）・桜美林大学非常勤講師、本研究所属託研究員）

中国にもパラサイト族が出現

ここ一、二年、中国では青少年層の失業率の上昇が注目を集めている。中国共青团が最近実施した「青年就業状況調査」によれば、今年第一・四半期における青少年層（十五〜二十九歳）の失業率は九%で、都市平均の登録失業率である四・五%を大幅に上回っている。

根本的要因は、労働力市場の不均衡にあるが、青少年の失業率の高さはそれだけでは説明できそうにない。失業青少年にも就職希望がないわけではないし、職業さえ選ばなければ就業も可能といわれる。

それでも彼等の失業率が高いのは、一人っ子政策の下で過保護に育てられた青少年の希望と年々厳しくなる企業の採用条件とのズレが拡大しているためとみられる。両親に生活を依存する「傍老族」（パラサイト）の出現は中国の新しい社会現象でもあり社会問題でもある。

（HK）